

アルミ付紙パックリサイクル事例集

アルミ付紙パック・酒パック



もくじ

もくじ

はじめに	1
広がり始めたアルミ付紙パックリサイクルの輪	2

【酒販組合・エコ酒屋を中心とする取り組み】

事例1 高槻酒類調味料食品事業協同組合(大阪府)	3
事例2 磐田小売酒販組合(静岡県)	4
事例3 静岡小売酒販組合(静岡県)、南但小売酒販組合(兵庫県)	5

【流通・小売事業者などを中心とする取り組み】

事例4 コープぎふ(岐阜県)	6・7
事例5 株式会社リカーマウンテン(京都府)	8
事例6 マルシェ株式会社(大阪府)	9
事例7 株式会社ヒロコーヒー(大阪府)	10

【自治体を中心とする取り組み】

事例8 曽根市(愛知県)	11
事例9 八王子市(東京都)	12

【酒造メーカーを中心とする取り組み】

事例10 瀧地区(兵庫県)	13
事例11 伏見地区(京都府)	14

【アルミ付紙パック再生の現場とその商品】

事例12 大和板紙株式会社(大阪府)	15
事例13 紙好き交流センター(大阪府)	16・17
事例14 リサイクルロンドぎふ(岐阜県)	18・19
事例15 信栄製紙株式会社(静岡県)、西日本衛材株式会社(兵庫県)	20

エコ酒屋全国分布マップ

はじめに

紙パックの仕様には大別して、内側にアルミのついているものとアルミのないものがあります。

牛乳パックに代表される「アルミなし紙パックのリサイクル」は学校でも子どもたちに環境教育のテーマとして広く取り上げられており、早くから行政回収・集団回収・店頭回収などさまざまな回収システムがあるというように、今や社会システムとして一般消費者の中に定着してきたと言えます。

ただアルミ付紙パックは、高品質のパルプを主原料にしているものの、リサイクルのための回収品目から外れることが多く、まだまだ製紙原料としてリサイクルする仕組みが整っているとは言えません。

1999年よりNPO法人集めて使うリサイクル協会では印刷工業会液体カートン部会から委託された「アルミ付飲料用紙容器リサイクルプロジェクト」を推進してまいりました。このプロジェクトでは、アルミ付紙パックが製紙原料としてリサイクルできるという情報發

信と同時に、各地に回収拠点を作り、アルミ付紙パックを含む酒パックの受け入れ製紙工場へ回収システムをつなぐことが活動の柱となりました。

最初は街のお酒屋さんを「エコ酒屋」として組織しアルミ付紙パックの回収拠点をスタートさせました。その後自治体や量販店などに徐々に回収拠点は広がっています。

またこのプロジェクトの中で特筆すべきは、障害者作業所が大きな役割を担っていることです。回収拠点づくり、回収作業、再生品づくりとアルミ付紙パックリサイクル推進の一翼を積極的に担ってきました。

これらの活動は2005年に地球環境基金の助成により「アルミパックリサイクル事例集」として一旦まとめましたが、その後もアルミ付紙パックのリサイクルは様々な広がりをもって進行しています。

この事例集は、前回紹介出来なかったところを主に、10年間に作り上げてきた多様化する回収拠点、回収ルート等を紹介するものです。これらの事例を参考に、地域の実情に応じたリサイクルの取り組みが広がれば幸いです。



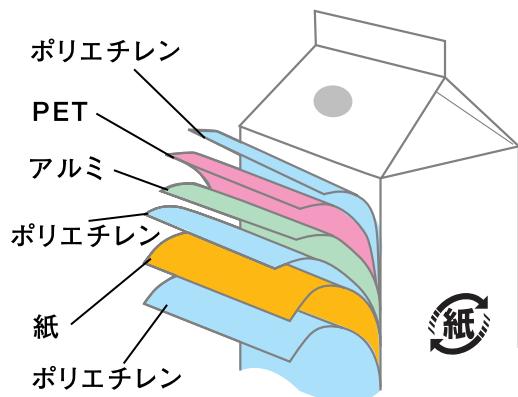
2010年 2月

広がり始めたアルミ付紙パックリサイクルの輪

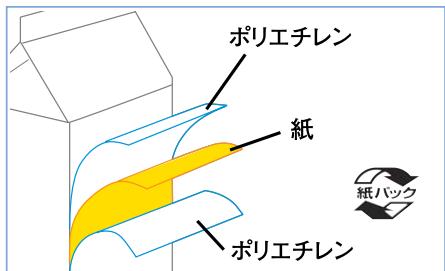
■内側にアルミ箔を貼ったアルミ付紙パックは、遮光性や密封性に優れており、長期保存に最適な容器です。現在、日本酒や焼酎などのアルコール飲料や、ジュース類、豆乳、清涼飲料など、さまざまな飲料容器にこのアルミ付紙パックが使用されています。紙パック全体の流通量のうち、約4分の1強をアルミ付紙パックが占めています。

■アルミ付紙パックは下図のように概ね多層構造となっており、紙の内側をアルミ箔やポリエチレンなど、外側をポリエチレンでラミネートしています。これまででは、これらのラミネート部分を紙と分離したり、ポリエチレンやアルミの残渣を処理することが難しかったため、なかなかリサイクルが進みませんでした。

アルミ付紙パックの構造(例)(アルミあり)



牛乳パックの構造(例)(アルミなし)



■容器包装リサイクル法でも、アルミなし紙パックは飲料用紙容器として独自の分別収集品目になっており、資源として(有価で)リサイクルされているため、事業者の再商品化義務は免除されています。これに対してアルミ付紙パックは、「その他紙製容器包装」に分類され、やは

り分別収集品目に含まれていますが、ほかの紙類と一緒に回収されると、禁忌品として取り除かれたり、リサイクルできたとしても、古紙としては低価値の再生品にされることになります。しかし、単独で集めれば有効な資源として活用できます。

■アルミ付紙パックに使われているパルプは、非常に上質の古紙原料です。その価値を最大限に生かすためには、「その他紙製容器包装」として集めるのではなく、アルミ付紙パック独自のリサイクルルートを確立することが必要です。再生紙メーカーの古紙再生技術も年々向上し、アルミ付紙パックも問題なく処理できる設備を持つメーカーが増えています。

■また、アルミ付紙パックを再生して作られる製品のバリエーションも、年々増えています。トイレットペーパー、ティッシュペーパー、タオルペーパーなどの家庭紙だけでなく、板紙製品についても、フラットファイル、紙皿、紙トレイ、紙箱、うちわ、貯金箱、ディスプレイキットなど多彩な製品が生み出されています。さらに障害者の福祉作業所では、小回りが利き小ロットの需要にも対応できるという特性を生かして、手すきはがき、名刺、カード、カレンダーなどの製品がつくられています。



〈板紙製品等(例)〉



〈家庭紙製品等(例)〉

事例1 酒販組合・エコ酒屋を中心とする取り組み

高槻酒類調味食品事業協同組合(大阪府)

※酒パックにはアルミ付紙パックとアルミなし紙パックの両方があります。

特色



「エコ酒屋宣言」のステッカー
このステッカーが目印です



高槻酒類調味食品事業協同組合の西田直弘理事長。店頭に酒パック回収ボックスを設置しています。「最初はごみを入れられるのではないかと心配したが、実際にやってみるとそんなことはなかった」ということです。

●全国に広がる「エコ酒屋」ネットワーク

・「エコ酒屋」とは、酒パックの回収を行っているお酒屋さんことで、「エコ酒屋宣言」のステッカーと店頭の酒パック回収ボックスが目印です。熊本小売酒販組合を皮切りに、現在全国で350以上のエコ酒屋が、「町のリサイクルステーション」として活動しています。お酒屋さんはもともと、日本酒やビールのリターナルびんを取り扱うなど、資源の再利用・有効活用にとって欠かせない存在でした。日本酒や焼酎の容器の主流がびんから紙パックに変わっても、エコ酒屋はその役割を担おうと頑張っています。また、この取り組みによって「お店の知名度が上がった」「お客様とのコミュニケーションが増えた」「環境保全に貢献しているという誇りが持てた」といった声も上がっています。さらに、希望

すれば紙パックなどの再生紙100%トイレットペーパーを販売することもできます。

・個々のお酒屋さんだけではなく、酒販組合などがリードして地域全体で酒パックのリサイクルに取り組んでいる例もあります。こうした地域では、行政が「分別の手引き」等の冊子やホームページで、「酒パックは地域のエコ酒屋に出してください」とアナウンスし、回収店舗の名前を公開するなど、情報提供の面でエコ酒屋の活動を支援しているところも少なくありません。

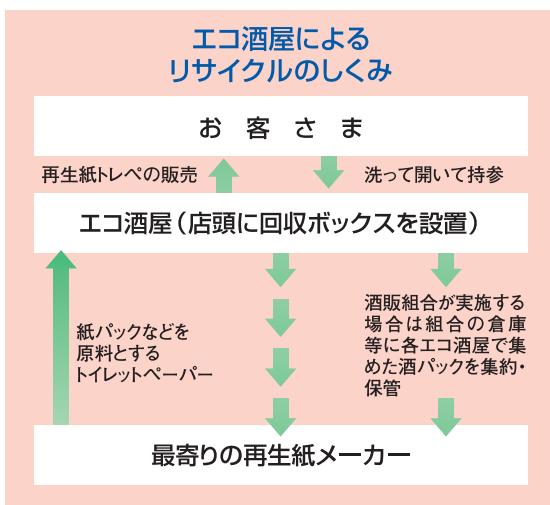
◆エコ酒屋として活動を始めるために必要なのは、所定の登録手続きをすることだけです。酒パック回収ボックスや、お客さんに協力を呼びかけるためのチラシなどは、すべて無料でお送りします。集まった酒パックは、最寄りの再生紙メーカーに直送していただきますが、送料も事務局が負担(いたん立替払いが必要です)しますので、酒屋さんには経済的の負担はいっさいかかりません。お問い合わせはNPO法人集めて使うリサイクル協会(電話06-6209-7155、ファックス06-6209-6685、メールinfo@r-kyokai.org)まで。

●リサイクルの経緯

・組合では従来から高槻市の委託事業として、ガラスびんの回収を行っていました。2005年度から、リサイクルの取り組みをさらに一歩進めて、酒パック及びペットボトルの回収もスタートしました。現在、市内48店舗がエコ酒屋に登録しています。

●行政との協働

・酒パックの回収への協力を呼びかけるチラシを、組合と高槻市が共同で作成し、市民に配布しています。



事例② 酒販組合・エコ酒屋を中心とする取り組み

磐田小売酒販組合・磐田市（静岡県）

※酒パックにはアルミ付紙パックとアルミなし紙パックの両方があります。

特色

- ・磐田市、袋井市、森町の54店舗がエコ酒屋に登録
- ・磐田市も「酒パックは酒屋のリサイクル回収へ」と市民に広報



酒パック回収ボックスを店頭に設置している磐田市内のエコ酒屋。



磐田市役所の環境衛生課入り口付近にも酒パック回収ボックスが置かれています。

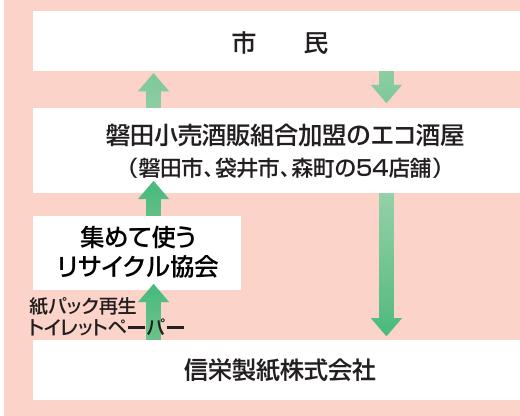
●リサイクル開始の経緯

- ・磐田小売酒販組合の理事を務める「大の瀧酒店」の中村薰氏が、2008年にたまたまエコ酒屋の取り組みを知って興味を持ち、組合に加盟する他の酒店にも声をかけて、同年7月から店頭での酒パック回収を始めました。
- ・酒パックのリサイクルに取り組むことにした理由について、中村氏は「地域に密着したお店として、少しでもごみの減量や資源の有効活用に協力できればと考えた」と話しています。

●リサイクルの現状

- ・現在、磐田市、袋井市、森町の54店舗がエコ酒屋として登録し、店頭に酒パック回収ボックスを設置

磐田小売酒販組合におけるリサイクルのしくみ



して、お客様にお店まで持ってきてもらったり、配達のときに受け取ったりして酒パックを回収しています。

・磐田市では、2006年度に策定したごみ減量行動計画において、「5年間でごみ量10%削減」「リサイクル率32%」という数値目標を掲げました。この目標を達成するためには市民や事業者の協力が不可欠であり、磐田小売酒販組合の取り組みもごみ減量・リサイクル率向上につながることから、市の広報などで「酒パックは酒屋が行っている酒パック回収にしてください」と案内しています。また、市民から「酒パックはどのごみに出せばいいのか」といった問い合わせがあったときも、エコ酒屋に出すようにアナウンスしています。

(右図は広報誌「ごみのないまちに」第18号より)



●リサイクルの課題

- ・エコ酒屋に登録している店舗の間でも、回収量の多いところと少ないところ、パックをきれいに洗って開いて出してくれるところとそうでないとあると聞いています。

事例③ 酒販組合・エコ酒屋を中心とする取り組み

静岡/南但小売酒販組合(静岡県/兵庫県)

※酒パックにはアルミ付紙パックとアルミなし紙パックの両方があります。

特色

- ・政令指定都市で初めての全市的な酒パックリサイクル事例(静岡)
- ・エコ酒屋登録店舗が着実に増加(南但)

静岡



静岡小売酒販組合の望月昭男理事長のお店にも酒パック回収ボックスが設置されています。ボックスの上部には、「酒パックは洗って開いて乾かして出してね。」と呼びかけるオリジナルのチラシを掲示。

南但



先頭に立って酒パック回収に取り組む、南但小売酒販組合の和田秀樹専務理事。「酒店はこれまで、儲からないことはしないという風潮が強かったが、これからは売った商品の空き容器を回収するのも仕事という使命感を持つことが必要」と語っています。

●リサイクル開始の経緯

- ・エコ酒屋の取り組みを知った組合が、加盟する酒販店に参加を呼びかけ、2006年8月から酒パックの回収がスタートしました。

●リサイクルの現状と課題

- ・静岡市内の27店舗がエコ酒屋に登録しています。各店舗で集めた酒パックは、組合事務局が回収したり、酒店の方からついでのときに持参したりして組合の倉庫に保管し、半年に1度くらいの割合で、県内の再生紙メーカー（信栄製紙）まで持ち込みます。年間約500kgを回収していますが、近年は紙パックのお酒を買うお客様が酒屋からスーパー・や量販店に流れており、回収量は頭打ちの状態です。



各酒店から酒販組合事務所に集められた酒パック。お店まで持ってきてくださる方は比較的高齢のお客さんが多いうちですが、若い世代にどう協力してもらいたい課題」とのことです。



キャンペーンの取り組みを伝える
2005年12月16日付読売新聞記事

事例4 流通・小売事業者などを中心とする取り組み

生活協同組合コープぎふ(岐阜県)

特色

- ・2009年2月から可児店でアルミ付紙パックの店頭回収をスタート
- ・アルミ付紙パックの飲料販売コーナーでもリサイクルを呼びかけ



コープぎふ可児店の店頭に置かれたアルミ付紙パック回収ボックス。



コープぎふ可児店では、リサイクルロンドぎふが作成したカードをアルミ付紙パック飲料の販売コーナーに掲示して、アルミ付紙パックリサイクルへの協力を呼びかけています。

●リサイクル開始の経緯

- ・岐阜県では、県内全域の福祉作業所をネットワークする「リサイクルロンドぎふ」が中心となって、市民・事業者・行政が一体となっての紙パックリサイクルによる障がい者の仕事づくりが進められています。こうした動きの中で、県内に6つの店舗を持つコープぎふとも関係ができ、「リサイクルロンドぎふ」の事務局を務める「ぼらむ交流・研究センター」の平田哲也氏が、コープぎふに対してアルミ付紙パック回収への協力を要請しました。
- ・コープぎふでは従来から、環境政策の柱として「私の暮らしに合ったエコライフを実践します」「環境に配慮した商品普及と環境配慮事業を進めます」「地域とのつながりを大切に一緒に取り組みます」の3点を掲げ、リサイクル活動の推進、マイバッグ運動などに取り組んできました。

コープぎふ可児店におけるリサイクルのしくみ

市民

月2回の割合で回収

ふれあいの里可児

ある程度溜またら持ち込む

あゆみ館(御嵩町)

自分のところで集めたアルミ付紙パックと一緒に売却

信栄製紙(株)でトイレットペーパーなどに再生



コープぎふ可児店の店頭には、アルミ付紙パックも回収を始めたという趣旨のお知らせが掲示されました。

2009年2月にコープぎふ可児店で実施されたアルミ付紙パックリサイクルキャンペーン。子供たちに120ミリリットルのコープジュースを配り、その場で洗って開く体験をしてもらいました。

●リサイクルの現状

- ・現在はコープぎふ6店舗のうち可児店・芥見店でアルミ付紙パックの回収を実施していますが他の4店舗(長良店、多治見店、尾崎店、恵那店)でも順次同様の取り組みを実施していく予定です。
- ・可児店の店頭の回収ボックスに集まったアルミ付紙パックは、すぐ近くにある福祉作業所「ふれあいの里可児」が月2回の割合で引き取りに行き、ストックしておきます。そして、ある程度たまつた段階で御嵩町の福祉作業所「あゆみ館」に持ち込みます。そしてここから、静岡県の再生紙メーカーに引き取られます。また、可児店で回収されたアルミ付紙パックの一部は、「障がい者の仕事名刺」として、やさしい風の会(郡上市)で印刷され、コープ職員の名刺に生まれ変わります。

●リサイクルの今後の課題

- ・環境と福祉を組み合わせたアルミ付紙パックリサイクルの趣旨は、誰からも共感を得ています。今後は、一人でも多くの市民にこの取り組みのことを知ってもらい、協力者を増やしていくことが最大の課題です。
- ・2010年度の全店実施を目指して、それぞれの地域で準備を進めています。焦らずじっくりと、地域で一緒に取り組んでいこうという機運を盛り上げることがまず大切と考えています。



コープぎふの取り組みは、新聞でも紹介されました

リサイクルに対する組合員や職員からの声

新聞に出ていましたね。
旦那に自慢しましたよ。

福祉と環境の
コラボレーション
ですね。

最近、アルミ付紙容器が
多いことを
実感しています。

社会にいいことを
やっているんだから、
もっと積極的に
宣伝してください。

これまで牛乳パックしか
意識していませんでした。
酒パックもリサイクル
できるなんて驚きです。

身近な所でリサイクルが
回っているのは、
リサイクルループ
・地産地消ですね。

事例5 流通・小売事業者などを中心とする取り組み

株式会社リカーマウンテン(京都市)

※酒パックにはアルミ付紙パックとアルミなし紙パックの両方があります。

特 色

- ・関西の酒量販店21店舗で酒パックを回収
- ・メーカーとの共同開発商品については紙パック1枚につきリサイクルポイント5点を進呈



●リサイクル開始の経緯

- ・(株)リカーマウンテンは、1990年に設立されたお酒の量販店で、現在京都府、滋賀県、三重県、愛知県、岐阜県、大阪府に計97の店舗を展開しています。
- ・リカーマウンテンは従来から、アルミ缶やビール瓶の回収など、3Rの取り組みを積極的に進めてきました。アルミ缶については、持参した数に応じてリサイクルポイントを進呈し、ためたポイントはお買物に使えるというサービスも実施しています。
- ・酒パックについても、リサイクルルートが確立でき

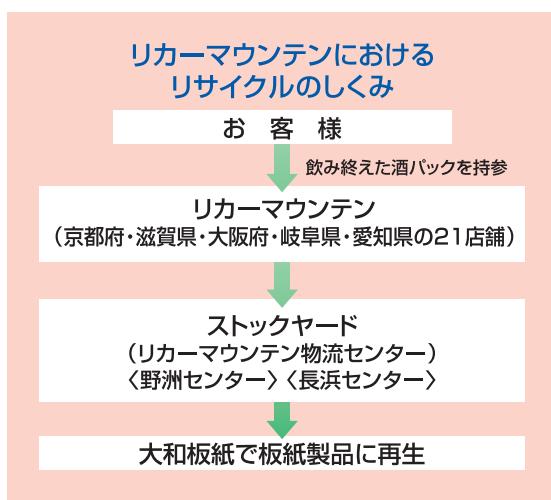
たことから、2008年6月より20店舗で回収をスタートしました。

●リサイクルの現状と課題

- ・現在、21店舗に酒パック回収ボックスを設置して、お客様が飲み終えた酒パックを回収しています。各店舗で集められた酒パックは、納品の車の帰り便を利用して回収され、物流センターでストックされ、一定量がたまつた段階で板紙メーカーの大和板紙(株)に引き取られます。

●回収店舗

- ・京都府…今出川堀川店、近鉄十条店、城陽平川店、精華学研店、山科新十条店、梅津店、八幡店、洛西店、嵯峨野店
- ・滋賀県…草津店、草津西店、甲西店、西大津店、水口店、守山店
- ・大阪府…如是店、津田店
- ・岐阜県…大垣店、岐阜羽島店、可児店
- ・愛知県…木曽川店



事例6 流通・小売事業者などを中心とする取り組み

マルシェ株式会社(大阪市)

※酒パックにはアルミ付紙パックとアルミなし紙パックの両方があります。

特色

- 居酒屋の店舗で使用した分だけでなくお客様からも紙パックを回収
- 回収された紙パックを手書き名刺にリサイクルして社員が使用

ときおり社内報で紙パックリサイクルについての記事を掲載しています。右図はその一例。



八剣伝魚住駅前店に設置されている酒パック回収ボックス



●リサイクル開始の経緯

- マルシェ株式会社は、「八剣伝」(531店舗)「酔虎伝」(64店舗)などを全国展開する大手居酒屋チェーン。「心の診療所」をキャッチフレーズに、お客様同士のコミュニケーションを通して地域社会・世界の人々の調和に貢献することを企業理念としています。
- 上記理念のもと、10年以上前から募金活動を行い、集まったお金をお土産施設等に寄付していました。こうした活動の中で、障害者施設のネットワークによる紙パックリサイクルの手書き作品をつくっている「紙好き交流センター」に出会いました。
- 同社が経営する居酒屋では、毎日お酒などの紙パックを大量に使用しており、洗って開いて紙好き交流センターに持ち込めば手書きはがきや名刺の原料になることを知り、関西の直営店舗で回収を始めることにしました。
- また、お客様からも家庭で飲み終えた酒パックなどを持ってきてもらおうと、酒パック回収ボックスを6店舗に設置しました。

マルシェにおけるリサイクルのしくみ

お客様

酒パック回収ボックスを店舗に置き、お客様から家で飲んだ紙パックを回収

八剣伝などの店舗(関西)

店舗で使用した紙パックも店員が洗って開いてリサイクルに
食材等の配送の帰り便で紙パックを回収

配送センター(茨木市)

ある程度たまつたら運ぶ

紙好き交流センター

つくりマルシェの社員が使用
つくりマルシェの社員が使用

●リサイクルの現状

- 各店舗で集めた紙パックは、食材や酒類を運ぶ配達車の帰り便に積んで配達センターで保管し、ある程度たまつたら紙好き交流センターに持ち込みます。
- 飲みに来るお客様以外でも、わざわざ酒パックを持ってくれるお客様もあり、回収を実施しているお店では利害関係抜きで地域の絆づくりに役立っています。
- 当初は紙パックを集めただけでしたが、その再生品を買うことでこそリサイクルの輪が完結するとの考え方から、社員が手書き名刺を紙好き交流センターに発注するようになりました。現在では本社社員の8割以上が手書き名刺を使っています。マルシェ環境企画室チームリーダーの堀内健司氏は、「自分たちが出した紙パックが名刺になって帰ってくるので、リサイクルの意義が伝わりやすい」と話しています。
- 名刺のほか、カレンダーやはがきなども積極的に紙好き交流センターの作品を活用しています。
- また、店頭に設置する募金箱も大和板紙(株)が製造した紙パックを原料とする再生板紙製のものに変えていっています。

●リサイクルの今後の課題

- 店舗によっては、洗わないまま・開かないまままで出しているところもあります。特に、忘年会シーズンなど繁忙期は大量に紙パックが出るため、洗ったり開いたりする時間がとれないこともあります。堀内氏は、「リサイクルの意義を理解すれば、次の段階のことを考えて洗って開く作業を進んでやるようになる」と、継続的な意識啓発に取り組んでいく考えです。
- その一環として、ときおり社内報で紙パックリサイクルについての記事を掲載しています。左上図はその一例です。紙パックリサイクルに取り組む店舗をもっと増やしていくことも、今後の課題です。

事例⑦ 流通・小売事業者などを中心とする取り組み

株式会社ヒロコーヒー(大阪府吹田市)

特色

- ・自社ブランドのアイスコーヒーの紙パックを顧客から回収
- ・コーヒーかすをすき込んだ再生手すき紙でメニュー表を作成



積極的にリサイクル活動を進める
(株)ヒロコーヒー
CSR委員会直営部サブマネージャーの梅田優子さん。
右手前に並んでいるのが自社ブランドの人気商品とな
っているアルミ付紙パックのアイスコーヒー。



いながわ店では入り口のところにアルミ付紙パック回収ボックスが設置されている。



回収したアルミ付紙パックを原料にされた
ギフトボックスの容器。



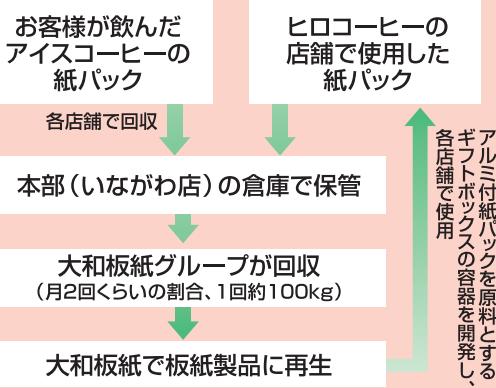
アルミ付紙パックを原料に、コーヒーかすをすき込んで手すきでつくったメニュー表。最初のうちはかすかにコーヒーの香りがするとか。「手すき紙の風合いが、お店の柔らかい雰囲気にマッチしている」と評判は上々。

<企業概要> 1977年創業、1988年創立。自社工房による製造(焙煎)から販売(一般消費者向け・業務用卸)までを行っており、直営店舗(喫茶+コーヒー豆の挽き売り)は北摂に14店舗。本部・直営部・製造部・営業部にてISO9001認証取得。「ホスピタリティの徹底」「職業意識の向上」をスローガンに

●リサイクル開始の経緯

- 2008年度にCSR委員会を設置。日本独自の環境経営システム「エコアクション21」の認証取得を目指しており、その一環としてリサイクル活動に取り組むことになりました。
- 同社ではアルミ付紙パック入りのアイスコーヒーを自社ブランド商品として販売しており、年間約6万本を売るヒット商品となっています。お客様から、飲み終えたパックをどこに持っていくといつかと尋ねられることもあったため、各店舗で回収することになりました。また、店舗から出るジュースなどの紙パックも同時にリサイクルすることにしました。アルバイトの主婦たちから、「紙パックは分別しなくていいのか」といった声が上がっていたことも、リサイクルを後押しする要因となりました。

ヒロコーヒーにおけるリサイクルのしくみ



- 当初は現場から「忙しい中で本当にできるのか」と懸念する声もありましたが、トップの姿勢としてリサイクルを推進する方向性を明確に示したためスムーズに進みました。また、実際に始めてみると思ったより簡単にできたそうです。

●リサイクルの現状と成果

- 全店舗で、お客様が飲み終えたコーヒーのパックを受け入れています。大規模店では入り口などに回収ボックスを設置し、それ以外の店舗ではスタッフが直接受け取っています。また、店舗(喫茶)で使用するジュースや牛乳等のパックについても、それぞれのお店で洗って開いて、一緒にリサイクルに出しています。
- アルミ付紙パックを分別したり開いたり作業を通じて、スタッフの環境問題に対する意識が高まったことが大きく、また、ギフトボックスやメニュー表など、資源を内部で循環させる仕組みができ、お客様に企業姿勢をアピールするツールにもなっています。2009年度は全社スローガンとして「みんなで3R」を掲げています。

●リサイクルの今後の課題

- コーヒーパックの回収量はまだ月に数十本で、販売量に比べると微々たるものなので、お客様への呼びかけを積極的に行っていきたいと考えています。パック自体に回収への協力を求めるシールなどを貼ることも検討中です。
- 紙パックの回収のほか、びんの回収、生ごみの堆肥化なども行っています。現在、最大の課題となっているのは1日平均50kg出るコーヒーかすの処理。一部はアルミ付紙パックリサイクルの手すき紙にすき込んで、店舗のメニュー表やプライスカード、名刺に活用していますが、大部分はごみになっているのが現状です。